

メッセージアウトライン ローマ12：1～2「心の一新」

[1] 「そういうわけですから」と、パウロはこれまで述べてきたところを受けて、その論理を現実的に大きく展開していく。ここで彼は命令口調ではなく、「神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします」と懇願する。彼の願いの第1は「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい」である。当時のギリシヤ哲学者は重要なのは霊であり、からだは、その霊を閉じ込める牢獄であり卑しいものであると考えていた。しかし彼はそのような考えを否定し、からだをも重視する。なぜなら、からだも神によって造られたものであり、特に信仰者にとっては聖霊の住まわれる宮であるから。→Iコリント6:19~20 それゆえ信仰者は現実のからだをもって神に仕え、そのからだを神にささげていかなければならない。そのささげ方は、①「神に受け入れられる」すなわち神に喜ばれ、神のみこころにかなったものとしてささげる。→何が神のみこころかは聖書に記されている。ゆえに聖書を読み、神のみこころを知り、そのみこころに従って生きることが大切。

②「聖い生きた供え物として」ささげる。「聖い」とは神のために別にされたものという意味。現実の生活の中で自分は神のものであるという自覚を持ち、神の前に汚れた者、俗悪な者とならないように真実な信仰とまことを持って自らを神にささげていく。そこからすべての行動が出てくる。→Iコリント10:31、マタイ5:13~16

パウロは「それこそ、あなたがたの霊的礼拝です」と言う。これは単なる形式や儀式を越えて人間として当然なすべき真実な礼拝という意味。礼拝は日曜日の教会の建物の中における礼拝だけではなく、信仰者の全生活をもってなされるべきものなのである。

[2] 「この世と調子を合わせてはいけません。いやむしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい」 この節にはパウロの第2の願いが書かれている。

信仰者はこの世の流れに合わせて、それに流されるような生き方ではなく、神のみこころに従って生きる必要がある。そのために、①「何が良いことで」あるか。②「何が神に受け入れられる」ことか。③「何が完全であるのか」をわきまえ知ることが大切。

これらはそれぞれ、何が人間にとって本当に益になり、善となるか。何が神に喜ばれることか。何が成長し、成熟した人間の生き方かということであり、これらをわきまえ知ることが、信仰者個人個人が現実の状況における神のみこころを知ることになるのである。そのために「心の一新によって自分を変える」ことをパウロは教える。

「心」とは原語では「思い」とか「思考」という意味があり、これを一新することによって自分を変える。そうしたら神のみこころをわきまえ知るようになるとパウロは言う。ではどのようにして思いを一新することができるのか。これは自分の決心とか努力のみでできることではなく、1節で言われたように、まず私たちが自らを神にささげていく時に、神が私たちを取り扱ってくださり、聖霊によって私たちの心、思考、思いを新しくしてくださるのである。このことも神の恵みによる。このようにして信仰者は神のみこころに従った生き方ができるようになるのである。